

# 古代・中世の村落における動物祭祀

松 井 章

- 
- |                  |                |
|------------------|----------------|
| 1. 考古学での動物祭祀の認定  | 4. 民俗学からみた動物祭祀 |
| 2. 発掘による動物祭祀の検出例 | 5. ま と め       |
| 3. 史料からみた動物祭祀    |                |
- 

## 論文要旨

従来、考古学で動物犠牲と考えられてきた例には、客観的な証拠もなく、単に骨や歯が溝、土坑、井戸から出土したからという理由で安易に動物犠牲と報告された例が多い。筆者が実際の動物遺存体の出土状態の検討、骨に見られる損傷などの観察を行なった結果、なんらかの動物祭祀として確実だと考えるのは、(1)古墳時代の葬送儀礼に伴う馬の殉殺、(2)水田の畦畔、水路に穴を掘り牛馬の頭蓋骨、その他を埋納する例、(3)集落内の井戸の機能喪失時に牛の頭蓋骨を埋納する例などである。また、(4)草戸千軒町遺跡から出土した牛のように、四肢をしばって、身動きできないようにして首を落とす、殺牛祭祀と考えて差し支えない例も存在した。いくつかの例から、古代では、生きた動物を殺して神に捧げる動物犠牲と、中世になって、それが形骸化したと思えるあらかじめ準備された動物骨の特定の部位をシンボルとして捧げる儀礼が見られ、その2つの動物祭祀が存在することを論証できた。本論では、動物祭祀のうち、特に古代以来見られる雨乞祭祀の方法としての「殺牛・殺馬」が、度重なる国家の禁止令にもかかわらず、中世、近世にまで確実に民間祭祀として存続したことを証明した。また、井戸の廃絶に伴って牛の頭を井戸の底に配置し、埋め戻す儀礼が存在したことも論証できた。

本論は、(1)考古事象の提示、(2)その事象に対する文献史的解釈、(3)その事象に対する民俗学的解釈、の3つの段階を意識的に分別しながら論を進めた。そして儀礼と結びついた動物遺存体の出土例を、文献史学、民俗学の成果を援用して解釈すると、雨乞のための水神への捧げ物、不浄のものを投入することによって神の怒りを生じせしめ雨を降らせる例、農耕の豊饒儀礼などが動物祭祀の動機として考えられることがわかった。